

西洋軍事学の武雄 西洋医学・化学の津山



1834年 武雄蘭書 (武雄鍋島家資料 武雄市蔵) 国重要文化財

研究の基礎貴重な蘭書
オランダ船が日本に持ち込んだ西洋の書物、蘭書。茂義は、当時貴重品であった蘭書を、およそ25年をかけて大量に集めました。その数、種類ともに非常に豊富で、現在も武雄には100冊以上が残っています。

武雄の蘭学、日本を動かす

武雄では、ペリー来航の15年以上も前から、西洋砲術の訓練が始められました。茂義は、砲術以外のさまざまな西洋の科学技術にも興味をもち、研究しました。蘭学を大胆に取り入れる茂義の姿勢は、佐賀藩主鍋島直正に大きな影響を与え、佐賀藩への本格的な西洋砲術の導入を決意させました。幕末の雄藩へと成長した佐賀藩は、戊辰戦争や明治維新において日本が近代化へと向かう重要な役割を担いました。西洋砲術から始まった武雄の蘭学研究が「日本を動かす」力となったのです。



1837年 騎兵体歩兵体散兵大訓練之図 (武雄市蔵)

日本人の手で作った初めての西洋式大砲

茂義は、自ら西洋砲術研究の先駆者である長崎の高島秋帆(たかしましゅうはん)に入門して西洋砲術を学びました。秋帆が造らせた大砲は、日本人の手で作った初めての西洋式大砲で、武雄での軍事研究に利用されました。



1835年 モルチール砲 (武雄鍋島家資料 武雄市蔵) 国重要文化財

江戸時代の終わりごろ、時の武雄領主である鍋島茂義は西洋からの珍しい品々を集めました。また、砲術をはじめとする西洋の先進的な科学技術「蘭学」を研究し、佐賀藩が幕末における雄藩へと成長していく基礎を築きました。武雄は長崎に近く、長崎を通じてオランダ船がもたらす様々な情報や書籍類などから、茂義は知識を得ていきました。また、日本各地で行われていた蘭学の研究にも関心を持っており、津山の蘭学者たちの研究成果も取り入れていました。

津山藩からは、宇田川(うだがわ)家や箕作(みつくり)家を中心に優れた蘭学者が輩出され、日本における西洋の科学技術の受容に大きく貢献しました。特に、宇田川家の玄随(げんずい)、玄真(げんしん)、榕菴(ようあん)の「宇田川三代」は、大きな功績をあげました。津山の蘭学者たちは、医者として江戸に在勤し、幕府の仕事も請け負い、他藩の蘭学者たちや江戸参府のオランダ人たちと交流しました。そこで得られた成果は著作物として残され、武雄にもそのいくつかが残されています。

初代 玄随(げんずい)



宇田川玄随肖像画 (公益財団法人 武田科学振興財団杏雨書屋)



1793年 西説内科撰要 (津山洋学資料館蔵)

日本初の西洋内科書の翻訳

『西説内科撰要(せいせつないかせんよう)』は、宇田川三代の初代である玄随が翻訳しました。外科書であった「解体新書」に対して、この本は日本で初めて内科を専門とした書物です。内科という考え方を日本で初めて紹介し、日本の医学の発展に貢献しました。

二代 玄真(げんしん)



宇田川玄真肖像画 (公益財団法人 武田科学振興財団杏雨書屋)



1805年 医範提綱 (仁木家資料 津山洋学資料館寄託)

医学書のベストセラー

『医範提綱(いはんていこう)』は、玄随の養子である玄真が著した医学書です。西洋医学を分かりやすくまとめたもので、リンパ腺の「腺(せん)」、脾臓の「脾(すい)」の文字などは、この書で定着しました。

医学から好奇心の趣くまに

宇田川三代の三代目である榕菴は、玄真の養子です。西洋文化への関心が高く、日本における近代科学の確立に貢献しました。榕菴は、医学から更に研究分野を広げ、日本に概念が無かった植物学や化学を研究しました。今では身近な酸素や水素などの元素名、コーヒーの日本語表記「珈琲」も実は榕菴が考案したものです。『植学啓原(しょくがくけいげん)』と『舎密開宗(せいかいかいそう)』はそれぞれ、日本初の本格的な植物学書、化学書です。



1837年 舎密開宗 (武雄鍋島家資料 武雄市蔵) 国重要文化財

1834年 植学啓原図自筆校正 (津山洋学資料館蔵) 津山市重要文化財



- 1774年 杉田玄白らが『解体新書』を著す
- 1793年 玄随が『西説内科撰要』を刊行
- 1798年 榕菴が生まれる
- 1800年 茂義が生まれる
- 1805年 玄真が『医範提綱』を刊行
- 1834年 茂義自ら西洋砲術を学び始める
- 1835年 武雄に残るモルチール砲が製造される
- 1837年 大塩平八郎の乱
- 1837年 茂義のもと西洋砲術の訓練開始
- 1841年 榕菴が『舎密開宗』を刊行
- 1853年 茂義が披露した西洋式砲術、佐賀藩が導入へ
- 1854年 ペリーが浦賀に來航
- 1854年 箕作阮甫、武雄温泉に立ち寄る
- 1867年 大政奉還
- 1868年 戊辰戦争

武雄軍団、秋田へ



植物図絵 (武雄鍋島家資料 武雄市蔵) 国重要文化財

二人は歳が2つ違いの同年代で好奇心旺盛、マニアックに研究する気質が似ています。それぞれ軍事と医学という異なる分野から蘭学を極めましたが、二人が同じようにハマったのはなんと植物学！茂義は植物研究用に薬草園を造って標本やスケッチで植物を愛でており、榕菴も植物についての本を何冊も書いています。遠く離れ、直接的な交流はなかった二人ですが、知らず知らず蘭学を通じて合っていたのかもしれません。

鍋島茂義と宇田川榕菴は似たもの同士!?

津山と武雄の蘭学小話

津山の蘭学者も虜にした武雄温泉

宇田川家に学び、蘭学研究の流れを汲んだ箕作阮甫は津山を代表する蘭学者の一人です。実は武雄温泉に立ち寄ったことが日記「西征紀行」に記録されています。阮甫は長崎から江戸へ帰る途中、温泉で疲れを癒そうと武雄に立ち寄っており、日記の中で武雄温泉は「鏡のように澄み切り、皮膚と肉の引きつけが緩む泉質に癒された」と書かれています。立ち寄った者を虜にするのは今も昔も変わらない武雄温泉の魅力です。

